

〔巻頭言〕

看護実践研究の論文投稿に向けて

紀要編集委員長 梅津 美香

本学は、開学以来、看護実践の改善・改革を目指して取り組む看護実践研究を重要視し、その推進を行ってきた。本学研究科の博士前期課程では、複数年をかけて看護実践研究に取り組み修士論文を作成する。その成果を公表する場として、岐阜県立看護大学紀要は13巻より修士論文の投稿を受け付けるようになり、17巻で5年目を迎えた。投稿を促すために、修了生には紀要編集委員会より投稿締切日や投稿後のスケジュールも含めて案内しており、17巻までに掲載された論文は、原著12編、研究報告9編、資料2編となった。研究論文として掲載されることは、言うまでもないことではあるが、成果が多くの人目に触れる機会が増えることである。掲載された論文は、修士論文の内容を精選し完成度を高めたもので、看護実践現場で課題に取り組む多くの看護職者にとって、現場で抱える課題を解決する方策や看護援助の方法への示唆を得られるものとなっている。一方で、残念ながら掲載に到らなかった論文も複数存在する。これらの論文は研究の取り組みには価値があるとわかるものの、一つの論文として公表するには、その良さが表現しきれていないケースがほとんどである。最終的に掲載に到らなかったとき、紀要編集に携わる者としては、看護実践研究を研究論文として公表することの難しさについて改めて考えさせられる。

紀要編集委員会では、平成27年度に看護実践研究の論文文化に向けた検討を実施した。検討内容は、共著者となる教員に理解してもらうために平成28年度の教授会にて報告した。その報告内容もふまえつつ、研究科で取り組んだ看護実践研究を研究論文として公表するために大切なことについて考えてみたい。

投稿から査読、修正を繰り返す過程において、紀要編集委員としてどのようにサポートするか逡巡することは多いのだが、もっとも難しいと感じるのは投稿された論文の構成そのものに課題を感じるケースである。投稿論文は修士論文を単純に短くすればよいというわけではない。投稿しようというときには、客観的に研究全体をながめ、独自性や意義を示すことのできる部分に焦点を絞り、あらためて論文の構成

を考えることがもっとも大切なことではないかと思う。また、修士論文では、取り組みの中で生じる様々な事象をデータとするためそもそもデータ量が多く、方法が複数の組み合わせであることから論文自体が長い。したがって投稿する際には、文字数の制約から分割して投稿することを検討する修了生は多いのではないかと思うが、分割して投稿する際にはそれぞれの論文に意義を持たせるよう留意してほしい。また、分割することにより、看護実践研究がもつ看護実践の改革や改善といったダイナミックな変化という成果が損なわれることのないようにまとめることも重要であると思う。

修士論文の投稿に際しては、教員との共著であることが条件となっている。本学紀要の場合、投稿から掲載決定までの間に査読を重ね委員会での検討を繰り返す。複数の査読者の意見は紀要編集委員会の意見も加え著者に返される。著者は査読による指摘に対応し、修正を行うことで完成度を高めていくが、査読結果が返された後の修正期間は短く、その期間内での修正ができない、あるいは修正が不十分なことも起こりうる。したがって、投稿前に論文について共著者となる教員とよく相談し検討することで掲載に近づけるのではないかと感じている。共著者となる教員の方々には、さらに査読・修正のプロセスにおいてもサポートをお願いしたい。

紀要の査読ガイドラインでは「論文を書き慣れていないと思われる研究者の論文で、体裁は整っていないがその内容は紀要に掲載する価値があると思われる場合には、できる限り教育的かつ建設的な査読を行ってください」と示している。ガイドラインに沿って、査読者からは論文を丁寧に読んだうえで教育的かつ建設的な意見が提示される。査読、修正を繰り返す中で著者自身が納得のいく論文となっていきように今後も取り組んでいきたいと考えている。